

『ローくん』

私達が越えなければならぬこと

二年〇組 〇〇〇

高さ十メートルからの飛翔、時速六十キロ

の急降下、一・四秒の空中演技、スポーツと

してはたいへんつらく、過酷で孤独な種目、

ダイビングに知季は青春をかけている。スポ

ーツとしては水との戦い、飛び込む時、下の

プールが何とも小さく見える恐怖、時速六十

キロあるスピードで突っこむ水面は一つ間違

えると激しく体をうちつけ、意識を失うとい

う。しかも、スピード競技ならタイムで勝ち

負けはすぐに納得できるのだが、たった一・

四秒の空中演技で評価される飛び込みはなん

とも難しくわかりづらい競技なのだ。

自分の所属するスポーツクラブの経営危機

の中で、日々練習にうち込む知季達をみて、

スポーツをする本当の意味がどんなものか分

かりかけた気がする。私は中学からテニス部

に入っている。去年同様、今年の夏休みも起

ちがいないと思っ
 ている。なかなか
 決まらな
 私
 の軟弱な体も動
 かせば絶対、体
 力が増すに
 ン
 ピックでも年々
 記録が更新され
 ることから、
 っ
 ている能力をひ
 き出すことができ
 る。オ
 リ
 スポーツは体力
 に挑戦するもの
 で自分の持
 か
 かった事として
 真剣に読むこと
 ができた。
 主
 人公に次々と起
 こる出来事を私
 自身にふり
 ま
 な悩みをかか
 える私にとって
 、この物語は
 た
 。部活をすること
 によって出てく
 るさまざ
 の
 で、勉強する時
 間も読書時間
 も少なくなっ
 生
 になると練習
 は時間も内容
 も充実してく
 る
 から迷惑もか
 ける。小学生
 の時に比べ、
 中
 学
 日曜日は家族
 そろって一緒
 に出かけられ
 ない
 毎
 日の練習に出
 るには家族の
 協力も大きい
 。
 ど
 毎日の練習の
 おかげで少し
 はうまくなっ
 た。
 天
 気のいい日
 ほどより元氣
 に見える。ほ
 とん
 び
 をする。太陽
 の下をはずみ
 まわるポール
 は
 眺
 めながら、「今
 日もがんばろ
 う！」と背伸
 早
 くからブライ
 ンド越しに照
 りつける太陽
 を
 き
 た時から部活
 のことで頭が
 いっぱいだ。
 朝

いポーチボレーがやっと決まった時、私は体
 でそう実感した。確かに練習したただけ
 前へ進むのを感じる。だから体力のことだけ
 を考えると部活はした方がいいに決まってい
 る。しかし、部活をするということとは、スポ
 ーツのことだけではすまされない部分が、知
 季にも私にもたくさんあるのだと、この本を
 読みながらつくづく考えさせられた。
 新しいコーチ麻木夏陽子がやってきた時、
 知季だけが期待を受け一人特別トレーニング
 を言い渡される。仲間の陵とレイジからは当
 然ねたまれ「なんでおまえがむかつくかわか
 るか？」と言われる。陵とレイジも一生懸命
 練習している。だれにも負けたくない心、ラ
 イバルとか嫉妬とか闘志とかうずまく心がそ
 う言わせたのだ。知季はどんなに心傷ついた
 ことだろう。私自身部活でうまい方ではない
 ので陵やレイジの心もよくわかり、知季のこ
 とを思うと胸が痛む。また、知季には知季を
 すごく慕ってくれぬ未羽という彼女がいた。

忙しい知季に気遣いながら一日だけデートを
 望む。知季もそれをうれしく思い、未羽のこ
 とを愛しいと思う。でも知季は未羽に心を預
 けられなかった。未羽との時間を作れないで
 いた。そのせいで未羽の心は去ってしまっ
 寂しいことだ。ダイビングへの気持ちが目一
 杯でそれ以外の事に心が傾けられない知季。
 それでも友人達が自分を思ってくれる心は少
 しぐらい大事にしななければいけないと考える。
 そんな知季を心から見守ってくれていたのは
 家族だ。お父さんは、クラブメイトにうらま
 れ落ちこんでいる知季を優しくフォローする。
 「友達だから先こされるところとくやしい。嫉妬も
 する。」「友達だから、だよ。」と。
 私は時に上っつらだけの読みで、理解でき
 ない心や出来事をそのままにして読んでしま
 うことがあるけれど、この本は気が付くと心
 から共感して読んでいた。知季のスポーツに
 かける素直な心が良かった。悩んでいても倒
 れない知季がとても良かった。スポーツで体

う。そんな知季に、私は拍手を送りたい。
 すごい物に向かってダイビングをするのだろ
 情とか個性とか正義とかを越えた、何かも
 て行くことができるのだろうか。きっと、友
 だ。これから先、知季は自分の意志をどう貫い
 を自信を持って送ることができるのではない
 っ。自分を越えた時、初めて自分なりの人生
 の限界を知り、人間としての弱さと強さを知
 がら、人と同じ人生を送るのは嫌だ。心と体
 人の目を気にしてしまふからだ。他人を見な
 知季は言う。人は人に採点されると弱くなる。
 そういうのを飛び込みで越えたくて……と
 生が送れる、みたいな模範演技があつてさ、
 たり、ジャッジがいてさ、こうすればいい人
 う。「おれたちって採点されたり、減点され
 った時、人は人に優しくなれるのだと私は思
 ことができるのだ。心と体に限界があると知
 る。それによつて自分自身の心と体に気づく
 力の可能性を求めれば限界を知ることができ